ネラ・ラーセンの『パシング』

——黒人の責務と私的行動——（Ⅰ）

安　部　大　成

まえがき
1 『パシング』に登場する二人の女性
——クレア・ケンドリーとアイリーン・レッドフィールド——
2 「パシング」に対する二人の見解
——クレア・ケンドリーとアイリーン・レッドフィールド——
3 アイリーンの「パシング」体験と白人社会の人種偏見

まえがき

黒人女性作家ネラ・ラーセンの小説『パシング』(1929年)は，その題名の通り，「パシング」という行動形態を扱ったものである。

「パシング」はまず，その現象の存在が前提である。その中で，当人が意識して行動すれば，これは行動形態として把握されるが，当人が意識しない場合は現象として把握される性質のものである。この小説は前者を扱っている。

本稿では作者ラーセンが「パシング」を扱う中で，何を問題にしているのかを検討したい。

「パシング」というのは，アメリカの白・黒両人種関係の中で生ずる現象とその中での行動形態のことであるが，この言葉は社会用語であると共に，人種関係に関する社会学用語でもある。

社会用語の意味で言えば，「パシング」とは黒人が白人として通る，また

は通すことである。

このような社会現象や行動形態が存在するのは，次の社会的現象による。

アメリカでは白人と黒人との婚外交渉と婚姻によって，多くの混血した人びとが誕生し，混血した人びとと白人または黒人とが相交わって，さらに混血が広がり，これらの人びとの人口は白・黒両人種集団のそれの，かなりの割合を占めている[1)]。

混血の仕方に度合いの相違があり，遺伝子のいろいろな組み合せにもよって，身体的諸特徴は，白人と区別のつかない人と黒人と区別のつかない人とを両端に置いて，その間に，多種多様に現われるのである。

ところが，アメリカでは白人集団と黒人集団は存在するが，混血人集団は形成されず，従って，これは存在しない。

その原因は白・黒両人種の政治，経済，社会における力関係において，白人集団が圧倒的に強く，数も多数を占め，この有力集団が「黒人」というものの社会的定義を行い，そこでは，黒人と血縁関係を持つことが知られた人は，その関係がどれ程遠く隔たっていても，その人は黒人と規定され，白人集団は，そのように処遇するからである。

端的に言えば，白人と区別のつかない人から黒人と区別のつかない人に至るまでの，あらゆる混血人を黒人と規定するのである。

このような社会では，「黒人が白人として通る，または通すこと」即ち，「パシング」という現象と行動形態が存在することになる。

さて，白人人口に占める混血人は，白人と区別がつきにくい人びとであり，その大部分が黒人との血縁関係があるのを当人が知っていても，その周囲が知らないか，あっても当人も周囲も知らない人びとであると言えよう。前者が「パシング」の行動，後者がその現象面である。黒人人口に含まれる混血人の中には，白人と区別のつかない人びともいる。この人びとは「パシ

ング」の可能性を秘める人びとである。「パシング」の行動形態には，後に述べるが，幾つかの型があり，これを意図する人もあれば，そうしない人もある。

黒人の諸権利を白人のそれと平等に保障することを求め，黒人を差別と抑圧から解き放つべく，それぞれの分野で活動した二人の著名な黒人の例を掲げてみよう。

「今日は二度ばかり，白人と間違えられた。朝方，沼のところで，白人の男が，私の身体に『黒奴（ネガー）の血が混じっているなんて，断じて有り得ない。』と言った……私はどんな白人にも劣らず，色が白いから，この地を離れて，白人として通すことになると思う。今日も年配の白人が，『おい，トム，ここにお前と同じぐらい白い黒人がいるぜ。』と言ったものだ。」[2)]

これはチャールズ W. チェスナットが17歳の頃に書いた日記の一部である。彼は20歳前に，白人として通すこと，即ち「パシング」を放棄し，作家として「自分自身のためだけでなく，子供のために，自分とつながりのある人びと，さらに，人類のために」[3)]働く決意をした。

NAACPの一指導者で，作家でもあったウォルター・ホワイトはその伝記に言う。

「私は黒人である。私の肌色は白く，目は青く，頭は金髪である。私の身体には，私が属する黒人集団が持つ身体的特徴はどこにも見当たらない。」[4)]

彼に自らを黒人と規定し，黒人として生きる決意をさせたのは，13歳の時，白人暴徒に襲撃された，1906年の悪名高い，アトランタ人種暴動の夜であった。

「パシング」を社会用語の面で述べたが，作者ラーセンが取り上げている問題を摑む上では社会学用語の面からアプローチする必要がある。

社会学者オリヴァー C. コックスは「パシング」を次のように定義している。

「パシングとは共通の文化の下で，有力人種集団の身体特徴を持つ混血の人が，この集団が占有するところの，社会的利益の分け前にあずかることを目的に，完全にその集団の一員になる過程と考えられる。」[5)]

これに続けて，彼は言う。

「パシングの一つの型をシャトリングと呼んでもいい。この型では，混血の人が第一次生活，つまり家族生活を一方の集団で，第二次生活，即ち勤務生活を他方の集団で行いつつ，両人種集団の間を往復する。シャトラー（「往復者」＝引用者注）の家族集団は常にと言っていいぐらい，被抑圧集団に属する。勿論，シャトラーは，きっぱりと決意して，一方の人種集団と完全に手を切ったところのパサーよりも，露見する危険に陥りやすい。」[6)]

ガンナー・ミュルダールは次のように定義する。

「あらゆる点で役立つ意味で言えば，“パシング”とは……黒人が白人になることを言う。……これはパサーが彼の交際相手になるところの白人達を騙すことと，そのことを知っているであろうところの黒人側が共謀して秘密にすることによってのみ達成できる。」[7)]

社会学者セント・クレア・ドレイクとホーラス R. ケイトンは「パシング」

を次の五つの型に分けている[8]。

1　本人がそれを意図しないが，白人として通ってしまう。

2　便宜上，白人として通す。

3　面白半分に白人として通す。

4　経済的必要によって，あるいは有益な機会を求めて，白人として通す。

5　「パシング」の最終段階――これは白人との社会的交際を目的に，白人として通すことも含まれるが，――人種・境界を越えて，完全に白人の側に入ってしまうことを言う。

これを型1～型5というように分けると，型4がコックスが言うシャトリングに当たる。さて，作品『パシング』には型1，型2，型4，型5と型3を除く行動形態が現われるが，その中でも作品の課題として作者ラーセンが扱う型5が，コックスとミュルダールが「パシング」として定義するところのものである。拙論で以後「パシング」と言う場合，付言しない限り，コックスの定義を念頭に置いている。

〔注〕

1）黒人集団を離れて白人社会に吸収されてしまう人びとの数は毎年変化があって，2万5000人から30万人まで大きな幅があると言われるが，あくまで見積りである[a]。

奴隷制350年間の異人種間混交と「パシング」した人の数を入れると白人人口のうち数百万人が黒人との血縁者であると言われるが，もっと多く見る学者もあり，2800万人の白人が黒人の祖先を持つと見る人もいる[b]。

a）St. Clair Drake and Horace R. Cayton, *Black Metropolis,* Vol. I (Harper Torchbook, 1945), p. 160.

b）C. Eric Lincoln, "Color and Group Identity in the United States," John Hope Franklin ed., *Color and Race* (Houghton Mifflin, 1968), p. 262.

2）Helen M. Chesnutt, *Charles Waddell Chesnutt,* Pionneer of Color Line

(Univ. of North Carolina Press, 1952), p. 13.

3) *Ibid.*, p. 17.

4) Walter White, *A Man Called White* (Arno Press and The New York Times, 1969), p. 3.

5) 6) Oliver C. Cox, *Cast, Class & Race* (Modern Reader Paperbacks, 1948), p. 430.

7) Gunnar Myrdal, *An American Dilemma,* Vol. II (Pantheon Books, 1972), p. 683.

8) St. Clair Drake and Horace R. Cayton, *op. cit.*, pp. 160, 161, 162, 163.

1 『パシング』に登場する二人の女性

——クレア・ケンドリーとアイリーン・レッドフィールド——

1920年代終り頃のシカゴ市。大都会の夏の熱気に疲れたアイリーンがタクシーを拾って，運転手の知恵を借り，涼と憩の場を求めて，ドレイトン・ホテルの屋上レストランに入る。ボーイの給仕を受け，湖から吹き寄せる涼風のもとに寛いでいる。

当時，南部諸州では人種隔離法が実施され，ホテル，レストラン，キャバレー，水泳場，公園，劇場，映画館，乗り物から公共の施設，学校，図書館に至るまで，白・黒両人種は分離されていた。

北部では人種間結婚を禁止する州が一部にあったが，人種隔離法はなかった。とは言え，黒人が白人と社会的に，親密な交際を持つことになるような，娯楽施設からは黒人を排除するところが多かった。

作者ラーセンは書く必要がないからそうしないのだが，アイリーンがタクシーを拾い，運転手がこの女性客の求めに応じて，一流のレストランへ案内し，またボーイが席に案内したのも，彼等が彼女を上流社会の白人の御婦人と見たからである。これは型1に当たる。アイリーンは自分が白人として通ることを知って行動しているから，これは型2である。

アイリーンがティーをすすり，潤っていると，夏をしのぐにふさわしい，しかも品の良いドレス姿の女性がじっと彼女を見つめているのに気がつく。その女性は黒い瞳の，口もとの魅惑的な，象牙のような白い肌をした美人であった。彼女が目を向けると，目をそらすのだが，また探るような目を向ける。

ここで初めて彼女は「パシング」が自意識の前面に現われ出るので，強い警戒心を持つことになる。そして，この女性がドレイトン・ホテルの屋上レストランの目の前の席に，黒人の女性が座っているのを見破ったのか，と苦々しく思うのだが，そんなことは有り得ない，と打ち消す。彼女が黒人の間にいると，白人達は彼女を常にイタリヤ人，スペイン人，メキシコ人，またはジプシィと間違えた。一人でいると，彼女に黒人との血のつながりを見つけることなど，とうてい有り得ないことなのであった。

作者はここで，アイリーンなる女性が，自分が黒人であることを隠そうとしているのではないことを明確にしている。

「……憤りと嘲り，ついで恐れが次々に，雪崩の如く彼女を襲うのを感じた。彼女は黒人であるのを恥ずかしく感じたり，それを人前で明かされたりするのを恥じるというのではない。心が乱れるのは，ドレイトンではそれを丁重に，巧妙に行うだろうが，それが何処であろうとも，人のいる場から追い払われることを想定するからであった。」[1)]

彼女が憤り，嘲り，恐れるのは黒人であると指摘されることでは毛頭ない。彼女が憤り，嘲り，恐れるのは人種差別であったのだ。ところが，彼女をじっと見つめているのは12年ばかり昔，消息を絶った，幼少から思春期に至るまでの親友クレア・ケンドリーであった。

クレア・ケンドリーの父親は白人，母親は黒人であったが，クレアは白人と変らぬ身体特徴をしていた。

父のボブ・ケンドリーはシカゴ市の黒人居住地サウス・サイドに住んで，雑役をして暮らしていた。アイリーンやその友達の父達が学んだ大学に通った人であったが，それに相応する職につかず，酒飲みで，評判は良くなかった。

クレアが白人と変らないのは，母親が黒人でも混血人であったらしく，そのうちの白人の身体特徴の方が，彼女に強く現われたと見られる。

白人のボブ・ケンドリーが，黒人居住地に住んだのは，黒人女性と共には白人社会に暮らすことが困難であったためと見られる。雑役で生活をしたのは，黒人女性と黒人居住地で暮らす白人の男には白人社会での就職は難しかったと言える。その憤懣を酒で紛らわしたらしい。

クレアの母は早い時に死亡，彼女は貧しいアパートの一室で，酒びたりの父と不幸な生活を送ったが，彼女は気の強い，敏捷な少女であった。ボブとクレアの父が学友であり，親友であったので，双方の家族間で親密な付き合いがあった。これがクレアとアイリーンが親しい所以である。アイリーンの家族が裕福で，それらの人びとが暮らすアイドルワイルドに住み，クレアの家族はそうではなく，離れたところに住んでいた。

クレアが15歳の時，父親が酒場の喧嘩で刺されて死んだ。既に他界している黒人であった母には親族が全くない。父は白人であったから，黒人社会に身寄りはない。クレアは天涯の孤児となったわけである。

サウス・サイドに住むアイリーン達は，間もなく，クレアが，その存在が知られなかった遠い親族の人に引き取られ，ウェスト・サイドに移って行ったのを知った。ウェスト・サイドは白人の居住地である。彼女達の理解では，

その誤りはクレアとの12年後の再会の時，明かされるが，そこで「パシング」している親族が引き取ったと考えられていた。但し，アイリーンの父はクレアが後ほど消息を絶った時，ウェスト・サイドに彼女を尋ねに行って，別の事実を知ったようだが，娘には何も口外しなかった。

クレアはサウス・サイドに時どき遊びに来たが，それは1年余りの間で，足は次第に遠のき，全く姿を見せなくなった。その後，彼女に関する噂が，サウス・サイドの若い男女によって，この黒人居住地にもたらされた。シェルビー・ホテルの宴会場で白人紳士を伴った，豪華なドレス姿のクレアに出会ったとか，リンカン・パークの町を運転手付きの高級車で白人男性とドライヴしている彼女を見たとかいうもので，それは噂と言うよりも，ゴシップめいたもので，非難の色合いが見られた。

アイリーン達が住むアイドルワイルドはブラック・ブルジョアジーの住宅地で，混血人の中でも，比較的肌色の白い人びとが多いようである。二人づれのクレアを高級レストランのマーシャル・フィールドで見かけたと言うマーガレット・ハンマーは白人と区別のつかない女性である。そのような男女がそこにかなり住んでいる。彼等は収入の良い白人社会で白人として働き，勤めが終ると黒人社会に戻って来て，黒人として生活している。型4であり，この人びとは社会学者コックスの言うシャトラーである。

基本的な生活の場を黒人共同体に置く人びとにとっては，人種的に敵対している外部社会，つまり白人社会の差別や圧迫から，その程度の差はあるにしても，共同して，可能な限り保護してくれた黒人社会と完全に関係を絶ち，諸個人の創意工夫，努力，自由意志などと関係のない性質のものであるところの人種的特徴，つまり白人と区別し難い身体特徴を利用して，有力な人種集団であるところの白人社会の側に移り住むことは，素直に容認し難い行為と考えられるようだ。「パシング」の型5，つまり最終段階の「パシング」に対しては，黒人社会では批判的風潮が強いようである。

アイリーン達は，クレアは黒人集団を捨て去って，白人集団のメンバーになってしまったと判断した。彼女はサウス・サイドには無縁の人として忘れられた。そして12年が経過した真夏の或る日，偶然のこと，彼女の方が，白人客だけを贔屓にするドレイトン・ホテル屋上レストランでアイリーンを発見したのであった。

クレアが語る，彼女の父他界後の体験，「パシング」に至る経過はアイリーン達の理解や判断からは相当離れたものであった。
「パシング」した後はそれを維持するために，「パシング」を意図し，それは歳月を経て日常化してしまってはいるが，クレアの「パシング」に至る経路はアイリーン達が推測したような，意図されたものではなかった。

黒人社会で孤児になったクレアを引き取ったのはボブ・ケンドリーの妹達であった。彼女達がそうしたのは，第一に，クレアは白人の叔母達が白人社会に引き取れる程，白人と区別がつかない少女であったこと。第二に，クレアを生んで死亡した黒人の母方には親族が皆無であり，従って，黒人側から，クレアとの血縁を名乗り出る恐れのある者はこの世にはいなかったからである。このことはクレアが語ったところの，彼女が叔母達から受けた処遇から明らかにされる。クレアをウェスト・サイドに引き取った叔母達，彼女達は独身らしいが，偏狭的と言ってもいい程信心が固く，恐ろしいことに，聖書的解釈に依拠する黒人差別観を身につけていた。
クレアはまず，彼女に黒人の血が流れているという事実とサウス・サイドに住んでいたということを決して口外しないように口止めされる。ついで，近所の人びとが叔母達を非難し，クレアに痛く同情をよせる程の，厳しい家事労働を強いられることになる。

「……彼女達の考えでは，厳しい労働は私に好適だと言うのよ。私には黒

人の血が通ってるし，それに二人とも‘黒人には働く気があるか’と言った見出しの読み物を書いたり，読んだりした世代の人なのよ。また，二人とも神様が，ノア爺さんが少し飲み過ぎた時，これをからかった科で，そのハムの子孫達に苦役を科せられた，という考えから抜けられないのよ」[2)]

とは言え，クレアも言う通り，彼女にはそこしか，住むべき家はこの世にはなかった。彼女は意図して，白人の家庭に，白人の世界に入ったのではなかったのだ。

この監督厳しい家を抜け出す僅かの機会に恵まれた時，これを逃さず，彼女は生れ育った，慣れ親しんだサウス・サイドに友を訪ねて行った。幾度かそうするうちに，彼女がアイドルワイルドのアイリーン達の家庭を垣間見て実感したことは，そこは彼女がすがりつくべきところではない，ということだった。そこは彼等の父母とその子供等の世界であったのだ。

「リーン，あなたには分からないわ，昔よくサウス・サイドを訪れた時，どんなにあなた方が憎らしかったか。あなた方には私が求めていて，一度もかなえられなかったものが，みんなあったのよ。」[3)]

彼女はサウス・サイドに行くのを止めた。そして，その頃，南米の或る国から，一山当てて帰国した若者と知り合った。彼は，叔母達の家で酷使される，身寄りのない，美しいクレアに深く共感し，二人は恋人となった。サウス・サイドの若い男女が，クレアと一緒のところを見かけて噂の種にした白人紳士がこの若者であった。

彼を伴って，マーシャル・フィールド・レストランに入った時，マーガレット・ハンマーがいた。彼女に声をかけようとするクレアを彼女は軽蔑するかの如く黙殺した。クレアはサウス・サイドから来ている友人達のこのような態度を考慮に入れて，最後の別れにも，サウス・サイドの友達を訪ねること

を断念したのであった。

クレアは家出して，この若者と結婚した。そして，彼女は夫ジョン・ベロウの商用の都合で，彼と共にヨーロッパへ旅立ったのだ。消息が絶えたのはこのためであった。結婚後，後で述べる通り，「パシング」が彼女に大問題として迫って来た時期があった。それはクレアの自宅に招かれた時，彼女達の旧友，ガートルードとクレアの会話を通じて明かされたが，ひどくアイリーンを憤慨させるものであった。

〔注〕

1) Nella Larsen, *Passing* (Arno Press and The New York Times, 1969), p. 19.
2) *Ibid.*, pp. 39, 40.
3) *Ibid.*, p. 41.

2 「パシング」に対する二人の見解

——クレア・ケンドリーとアイリーン・レッドフィールド——

アイリーンは，「シャトリング」も最終段階の「パシング」も，試みようとしたことは一度もない。茶色の肌をした黒人医師ブライアン・レッドフィールドと結婚し，ニューヨークのハーレムに暮らしている。

彼女にとって「パシング」，即ち，

「この予測のきかない，危険なもくろみ，全く未知ではないが，間違いなく，全面的には友好的でないところの，社会環境のもとで機会を摑むために，慣れ親しんだ人びとや物事とすっかり手を切って離れてしまうこと」[1]は「相いれないこと」[2]であった。

そこで，この「パシング」を行っているクレアに，礼を失しないような問い方で尋ねてみたいことがあった。その一つは自分の経歴と家族関係をどう

説明するかであり，他は黒人と接触する時どう感じるかであった。これを問い一，問い二としよう。

問い一は，前章で述べた如く，クレアには黒人の母方に親族が皆無である上，両親が死亡して不在であることから，彼女にとって，身の上を説明するのはたいして難しいことではなかった。存在する家族はと言えば，彼女を引き取った白人の父方のそれ，叔母のグレイスとエドナの二人であって，これは「パシング」に役立ちこそすれ，妨げにはならない。そればかりか，彼女の身の上に関する諸事実の一部，「パシング」する上で差し障りになる部分を，彼女達の方から明かさぬようにと，クレアに口止めしていたことが，彼女に極めて有利に働くことにもなった。付言すれば，この口止めによって，二人の叔母がクレアを引き取ったことが，まさに，クレアを否応無しに「パシング」させてしまったと言える。

クレアはアイリーンの問いに対して，上に要約した内容の答えをする。しかし，クレアの身の上が別のものであったとしても，彼女は経歴と家族関係について，十分対応し得る，と言う。

「別状況だったら，私自身を説明するのに，まことしやかな作り話を用意しなければならなかった筈だわ。私には創作力があるから，ものの見事に，信じ込ませたに違いないわ。」[3)]

彼女は「まことしやかな作り話」でもって相手を出し抜く，と言うのである。

問い二に関して，彼女は答えていない。問い一に対する答えで十分なのである。黒人側に親族がない人が，黒人集団のメンバーに出会った時の心の反応と，アイリーンのように父母，兄弟がある人のそれとは全く異なるものであろう。

黒人と接する時の反応をクレアは述べなかったが，彼女が黒人との関係を

疑われることのないように，黒人や黒人居住地との接触を避けていることは間違いなかった。これがやがて明らかになり，「パシング」を“相いれない”ものとするアイリーンをひどく憤概させるもとになる。

さて，クレアは「パシング」について，次のように言う。

「それを実行するのは恐ろしい程容易なのよ。本人が通るタイプなら，その後必要なのはちょっとした度胸だけよ。」[4)]

「パシング」はクレアも言う通り，「通るタイプ」の人であることが前提条件である。このタイプでも黒人の目をごまかすことが難しい場合が多いが，白人の場合はそうではないと言う。

「恐らく，彼等白人の数がずっと多いからなのか，それとも平穏無事に暮らしていて，くよくよ気に懸ける必要がないのか，判断つきかねるわ。」[5)]

白人の数が多いだけではあるまい。民族系，出身国系を考えると白人も多種多様である。その上，移民して来た白人もいる。大都会に住めばその匿名性によって，人の身の上は詮索されない。

クレアが言う後半の部分だが，生活が安定していて，余裕があれば，人びとは些細なことに拘らない。社会学者ドレイクとケイトンの面接調査によれば，

「北部の一部の白人の間では『パシング』している人が黒人と社会的交際をしなければ，その人に少々黒人の血が混じっていても，これを見逃すことを厭わない。……何人かの人は黒人の血が混じっていると思われる白人達のことを知っているが，そのことは冗談の材料に納まる程度のことである。一例では，疑われた当人も含めて，誰もが面目を保つために，混じっ

た血は，多分インデアンのものだろう，と言うことで済んだ。」[6]

アメリカではインデアンと白人との混血は白人と見なされており，著名な人の例として，社会科学者ミュルダールは，第31代大統領ハーバート・フーヴァーの時にその副大統領を勤めたチャールズ・カーチスを挙げている[7]。

クレアが相手を出し抜く優れた能力と度胸とを持って，白人集団の中に入り込み，そのメンバーとなった原因あるいは理由は何であったのか。

彼女はその原因は偏狭的に信仰心が強く，聖書的解釈による人種差別観の虜になっていた二人の白人の叔母達にある，と言う。

「今の私にしたのは彼女達なのよ。何故って，当然のことに，私はそこを抜け出す決意をすることになったんだもの，恵みの助けをこうむる者でも，厄介扱いされる者でもなく，まず軽率なハムの娘でさえなく，一人の人間になるためにね。勿論，いろんなものを手に入れたかったわ。顔も形もわるくなかったし，白人で通れることも分かってたのよ。」[8]

一人の人間として生きて行くために，彼女は18歳の時，偏見に満ちた，狭い，卑劣な白人の世界を抜け出して，拘束されない，自由な，大きな白人の世界に入って行ったのである。

アイリーンはクレアの質問に答えて，「パシング」することなど，考えたことさえないと言う。

「あのね，クレア，私には欲しいものはみんなあるの。まあ，もう少しお金が欲しいと思う以外にはね。」[9]

彼女は黒人集団の中でも，裕福な階層，世に言うブラック・ブルジョア

ジーに属する家庭の子女である。1920年代があと数年で終る頃が作品の主たる世界だが，30歳を少し越える年齢のこの女性やその学友の父母が既に大学で学んでいるところからして，それは明らかである。アイリーンはシャトリングする経済的必要はなく，また最終段階の「パシング」を行うことによって手に入れたく思うものもない。その彼女にとって，「パシング」は初めに述べたようなものなのだ。

〔注〕

1) Nella Larsen, *Passing* (Arno Press and The New York Times, 1969), pp. 36, 37.
2) *Ibid.*, p. 40.
3) *Ibid.*, p. 38.
4) *Ibid.*, p. 37.
5) *Ibid.*, pp. 37, 38.
6) St. Clair Drake and Horace R. Cayton, *Black Metropolis,* Vol. I (Harper Torchbook, 1945), pp. 159, 160.
7) Gunnar Myrdal, *An American Dilemma,* Vol. I (Pantheon Books, 1972), p. 113.
8) Nella Larsen, *op. cit.*, pp. 40, 41.
9) *Ibid.*, pp. 43, 44.

3　アイリーンの「パシング」体験と白人社会の人種偏見

ドレイトンの屋上レストランで12年振りに偶然出くわした二人だが，ヨーロッパから一時帰国中で，旧友とは久し振りだったクレアは強く再会を求める。「パシング」に対して否定的な見解を持っているアイリーンは「パシング」を実行している人との接触を好まないが，親しい友であった知人の求めと，この女性に開花している，少女の頃から思春期に至るまでの，彼女特有の魅力に抗することができず，これに応ずる。

クレアからの電話連絡を待って彼女の宅を訪ねることになるのだが，別れて気が付いてみると，彼女の住所，電話番号が知らされていない。彼女の旧姓はケンドリーだが，結婚後の姓を口にしなかった。これではクレアを探し出すことは不可能であった。

アイリーンは自分の家庭，夫，息子，両親，他の友人の結婚，家族の生死について話し，クレアはしばし新たな追憶に浸った。彼女には，冷酷であった二人の叔母以外に身寄りはなく，家出と白人の若者との結婚という「パシング」に至る身の上話で尽きるにしても，夫の姓を知らせずに済ませたことは，アイリーンに疑念と不快感をもたらした。

疑念――クレアはアイリーンが滞在中の彼女の実家，つまり彼女の父親の居所を知っている。クレアはシカゴに来て，既にそれを電話帳で確かめているのだ。他の旧友の居所もそうしたらしい。二人が再会を約束したのだから，言わば共同で行為するという協定が成立したのだ。ここにおいて，二人の間には同等の条件，同等の権利が暗黙のうちに保障されていなければならない。クレアはアイリーンと交信する上で，手段となる情報を持っているが，アイリーンにはそれが皆無である。クレアはその手段を，自分の判断にもとづいて自由に利用できるが，アイリーンには不可能である。クレアは選択の自由，つまり自由裁量権を持つが，アイリーンにはその権利がない。他者の権利や条件をクレアは尊重しないのか。

不快感――クレアは「パシング」しているから，それが露見することになるような事態は極力避けねばなるまい。黒人集団の一員であるアイリーン側からのアプローチは，クレアにとっては危険である。クレアが自らの安全を確かめて行動を執るのが危険を避ける最高の方法である。アイリーンはそれをよく理解している。そこから考えれば，クレアに対する疑念は晴れる。いや，だからこそアイリーンは不快に感じるのだった。彼女には自ら任ずる，思慮分別の才があった。クレアの安全を脅かすような行動を彼女がする筈がなかった。また彼女は友人に対して，その信義を守る心が備わっていた。彼

女にはクレアがそのいずれをも軽視しているように思えてならなかった。

アイリーンはこのような理由と「パシング」に対する否定的な考えによって，クレアとの関係はもう終りにしようと一度は決意したが，彼女の嘆願するような頼みを受け入れた。

このアイリーンのクレアに対する戸惑いは，同性の女性に感じる魅力が介在してはいるが，主たる原因は彼女の「パシング」している人，つまりその実践者に対する次のような，二律背反的な情感と対応にある。

「『パシング』って変なものね。私達はこれを非難しながらも容赦するのよ。軽蔑の念を催すのに感服するのよ。異様な反感を覚えて避けるんだけど，これを保護するのよ。」[1)]

連絡を受けてクレア・ケンドリーを，即ち，ジョン・ベロウ夫人を訪ねて行くと，そこには既に一人の白人の女性が来ていた。よく見るとそれはガートルード・マーチンであった。

この女性は白人と結婚して「パシング」しているのだが，大学時代のボーイ・フレンドである夫，フレッド・マーチンは，自分の妻になる女性が，社会的定義によれば，黒人であることをよく承知していた。その上で結婚したのだから，彼は人種偏見から，かなり解き放たれた人と言えよう。但し，彼女に黒人の血が通っていることは家族のうちに止めてあって，外部には漏らしていない。白人社会でこれを知っているのは彼とその両親だけである。変った形の「パシング」に見えるが，叔母宅にいた頃のクレアの「パシング」に似ている。しかし，夫が知っている点ではクレアの現状とは質的に異なる性質のものである。

クレアの夫は未だ帰宅していない。その間，三人の女性は「パシング」をかなぐり捨てて，胸襟を開いて語り合う。二人は白人になった黒人として，

一人は白人の姿をした黒人として。

そうなったのは，「パシング」している二人の間にあって，アイリーンの機嫌が良くないと見たクレアがガートルードの双子を話題にしたことからであった。

「パシング」している人が白人と結婚した後の第一の関門は生れて来る子供の人種的身体特徴である。「パシング」している人が男であれ，女であれ，生れて来る子供が心配の種になる。「パシング」が行われるのは人種の混血が基であるから，当然予想されるものである。

作者ラーセンが，三人の女性を作品に登場させた以上，これらの女性の妊娠，出産を通して，「パシング」の問題点を引き出そうとするのは大変効果的な方法である。

生れた子供が混血児であったがため，妻に黒人の血が混じっている，従って，妻は白人ではないと判断して離婚した男が，後で自分の若死した母が混血人であったことを発見する話，これはケイト・ショパンがその有名な短編，『デザレイの赤ん坊』（1894年）で扱っているものだが，直接「パシング」に関係する作品ではない。この作品では，夫婦はいずれも自分が白人だと思っていたのだから，敢えて言えば「パシング」の現象面から人種偏見を持つ者が陥る愚かにして悲惨な自縄自縛の状態を描いたものと言えよう。自縄自縛に陥らないようにするには偏見を捨てる以外に手はないということでもある。

ミュルダールも，またドレイクとケイトンも「パシング」と人種混交を扱う中で，アメリカ社会に広く流布している「真黒赤ん坊」という，差別観から出た，差別者を脅かす，但し真実性のない怪談を紹介しているが，これは後述する。

さて，ガートルードには双子の，アイリーンには二人の男の子がいるが，クレアには一女しかない。男の子が欲しいでしょうと言われて，クレアは答える。

「要らないわ，男の子はいないけど，これから生もうとも思わないわ。恐ろしいのよ。マージャリーが生れるまでの9カ月間ずっと，子供が黒いんじゃないかと，怖くて怖くて，もう死にそうだったわ。有り難いことに，無事だったんだけど。もう，二度とそんな危いことはしないわ。神経が磨り減って，ただもう最悪よ。」[2)]

クレアが「パシング」した後も，白人で通す上で，これが最初の試練であっただろう。もし，仮に黒くはなくても，赤ん坊に混血の特徴があったら，クレアの「パシング」はどうなっただろう。マーク・トウェインの『ブディンヘッド・ウィルソン』におけるロックシーのように，人の赤ん坊とすり替えただろうか。それとも，夫方に黒人の祖先を求める工夫をしただろうか。あるいは，破綻して……

この告白めいた出産時の心境を聞くと，ガートルードが全く同じ体験を語った。彼女の場合は，義母と夫が彼女の過剰な心配を和らげようと懸命に説得する。ところが彼女の方が非科学的で頑迷で，黒人の身体特徴は

「数世代飛び越えて，突然現われるから恐ろしい。」[3)]

幸いにも白人と何ら変らぬ双子の息子が生れたが，もう妊娠は懲り懲りだと言う。彼女は「パシング」しているとは言え，夫は知っている。クレアとは状況が異なる。彼女は世間に対する「パシング」の破綻を恐れるのか，それとも，自分の身体に存在する黒人の遺伝子が子供に受け継がれるのを恐れるのか，夫とその家族の人びとよりも，黒人に対する差別的偏見が強いのか不明であるが，最後のものでないことはいずれ明かされる。

クレアもガートルードも，たとえアイリーンが「パシング」はしていないにしても，彼女の夫は彼女並に白く，「パシング」しようと決意すればそれができた人だと思っていたらしい。最終段階の「パシング」はアイリーンと

同じく行わないにしても，「パシング」の型1から型4までは可能な，身体特徴だと。だからこそ，黒人の身体特徴の体現をあからさまに嫌悪と侮辱の対象にしたのであった。

アイリーンが憤慨を抑えて，一矢あびせるべく，私の息子の一人は黒いのよ，と言うとガートルードは驚愕する。彼女は驚いて言葉が出ない。やっと口ごもりながら言ったことは

「あっ！　そのわけは，あなたの御主人が，それ，あの，えー，黒いわけ？」[4)]

アイリーンは嫌悪，怒り，軽蔑の情が高まるのを抑えつつ，「パシング」している二人を嫌っているわけでもないことが伝わりもするように，自分の夫は正確に言えば「パス」できないわ，と答えた。

彼女は，「パシング」は単に「慣れ親しんだ人びとや物事とすっかり手を切って離れてしまうこと」で終るものではないことを知った。「パシング」は自分の子供が僅かでも黒人の血を受け継ぐことを恐れることも含まれていたのだった。

クレアがアイリーンの気持を察して，人種問題や厄介な話になりそうなものを避けて，ヨーロッパ諸国の生活を語る。そこへジョン・ベロウが戻って来る。

注目すべき点は，ここで，三人の女性が正に暗黙の裡に，あたかも事前に申し合せでもあったかの如く，一糸乱れず，一転して「パシング」態勢にはいる点である。一人の白人に対して，三人は黒人として結束しているのである。

アイリーンにとって，またガートルードにとっても意外なことが目の前で展開された。

「『やあ，ネグ』，これが彼のクレアに対する挨拶であった。

かすかにではあったが，ぎくっとしたガートルードは直ぐ落ち着きを取り戻して，密かにアイリーンに目を向けると彼女は唇を噛み締めて，その夫と妻とをじっと見据えて座っていた。たまたまこの男が彼女の夫であるにしても，「パシング」しているとは言えクレア・ケンドリーが，外部の者に黒人集団の出である彼女をこんな風に嘲るのを許しておくなんて信じられなかったのだ。ひょっとすると，彼はクレアが黒人であるのを知っているのだろうか。過日の彼女の話しぶりでは，彼は知らないものとアイリーンは理解していた。しかし，客の面前で，そんな風に彼が彼女を呼ぶなんて，極めて無礼であり，あからさまな侮辱であった。」[5)]

ネグとは黒人を侮辱する言葉，「ネガー」を短縮したものである。アイリーンの心中を素早く読み取った鋭敏なクレアは，何故夫がネグと呼ぶのか，その所以を説明させる。

「えーと，それはね，こんな風にして始まったんだよ。結婚した当初，彼女は真白で，まるでユリの花のように白かったんだよ。ところが，はっきり言うとね，彼女，だんだん色が黒くなって行くんだよ。そこで言ってやったんだ。お前，気をつけないと，そのうち目を覚ましたら，黒ん坊になってるぞって。」[6)]

彼はそう言って唸るように笑った。クレアが鈴を鳴らすような声で笑う。ガートルードが甲高く笑う。じっと歯を食いしばって成り行きを見ていたアイリーンは「これは面白い。」と叫ぶとどっと笑い出した。全員が哄笑する。

三人が一体となった「パシング」している女性の笑いと，ジョン・ベロウとは笑いの対象が異なる。ジョン・ベロウは彼がうまくとばした黒人侮辱の冗談が，この場の四人に等質の効果を及ぼしたと判断している。四人の白人

が連帯して笑いに浸っていると信じ切っている。三人の女性は真実を知らぬ，無邪気な，しかし人種の相違をもとに人間を侮辱するこの白人の男の欠陥を大笑いしているのだ。

アイリーンは哄笑の最中にクレアの表情をとらえた。彼女の心に触れたアイリーンは即座に笑いを止めた。

クレアはこの機会を逃すまいとしたのであろう。夫の手を取って，彼を慰めるかのように，信頼をこめて言う。

「あらまあ，あなた，こんなに長く一緒に暮らして来たのですもの，私が1,2パーセント程度黒人であっても，何の変りもないじゃありませんか？」[7]

彼女は18歳の時，冷酷な叔母の家から，彼女を連れ出してくれた若者，愛し合って結婚し，苦楽を共にした夫ベロウを信じていた筈だ，人間として。彼女は「一人の人間になる」ために，彼と家出して結ばれたのだ。

その夫の返事はクレアだけではない。アイリーンとガートルードをも驚かす，冷酷な，差別と偏見に満ち満ちたものであった。

「ベロウは手を振ってきっぱりと拒否した。『そりゃ駄目だよ，ネグ』と彼ははっきり言った。『私にはそんなことは通らないよ。お前が黒ん坊じゃないのが分っているから，それで済むんだよ。お前は黒ん坊じゃないから，好きなだけ黒くなっても私はかまわんよ。このことではけじめをつけてるんだよ。私の家に黒ん坊はお断りだ。これまでもお断りだったし，これから先もだ。』」[8]

アイリーンの唇が打ち震え，抑えがたい程であった。クレアの方を見ると彼女の目はアイリーンに向けられていた。その目はこれまでに見たことのな

い，別の生き物の目のようであった。アイリーンはその場の状況が危険をはらんでいるのをかすかに感じた。そこで，タバコを手にしていた彼女はベロウが差し出す火を心よく受けた。クレアもガートルードも微笑を浮かべた。クレアとベロウの間に生じた危険をはらむ話題を逸らすべく，アイリーンはユーモラスに，ベロウさんは黒人がお嫌いですの，と問いかける。

「レッドフィールド夫人，あなたはその点で間違っておられる。全くそんなことではないんです。嫌いなんじゃない。憎悪してるんです。黒くなりかかってはいますが，ネグの奴も黒人を憎悪してますよ。黒人を見ると，私は身の毛がよだつんです。貧弱な，黒悪魔を見るとね。」[9)]

黒人と付き合ったことがあるのか，と問うアイリーンの語調に黒人防禦の響きがあるので，居心地を悪くしていたガートルードがびくつき，クレアは不安の目を向ける。二人はアイリーンがベロウと衝突し，そこから自分達の「パシング」が露見するかも知れないような，危険な状況が生ずるのを恐れている。それがアイリーンには分かる。だが，こうした三人の女性の張り詰めた心的関係の真っただ中に自分が置かれていることをベロウは察知できない。

「『有り難いことに，ありません。それに，そんなことを望んだことは一度もありません。でもね，私の知人に，黒人本人よりも，はるかに彼等のことをよく知っている人達がいます。また，彼等のことについては，新聞などで読んで知っています。いつも強盗や人殺しをやってます。さらに，』と彼は付け加えた，『もっと悪いことを。』と。」[10)]

この最後に付け加えた部分が「パシング」をも含むと見たらしく，ガートルードが抑え気味に，ぐすぐすっと笑った。

人殺しよりも悪いことをすると言ったベロウに対して，この場はやむなく，便宜上「パシング」しているにすぎないアイリーンは激怒し，すんでのところ，あなたは三匹の黒い悪魔の間に座って，お茶を飲んでいるのよ，とどなりつけたい衝動に駆られるのだが，それはクレアを巻き添えにすることになるという強い危機感によって鎮まる。アイリーンはクレアに対する信義と配慮とによって，黒人である彼女自身とその仲間達に加えられる差別的偏見にもとづく侮辱と軽蔑を忍ばねばならぬ状況に置かれてしまう。彼女にとって，クレアの求めに折れて，「パシング」を付き合ったことは，極めて不愉快で，苦痛に満ちた体験であった。

クレアが夫に1,2パーセント黒人であってもいいではありませんか，と言った時，ベロウは手でそれを打ち払うようにして拒絶した。100パーセント白人でなければ駄目だと言うのだ。そう言わせるのはベロウに内在化された「一滴でも黒人の血が混じると，人は黒人になる。」という白人社会の黒人排除を目的とした差別的な社会的定義である。

「“黒人”というものはアメリカでは白人達によってその定義がなされる。それは人種的血統の観点でなされる。黒人の血が通っていることが知られている人は――それがどんなに遠い過去に受けたものであろうと――黒人と定義される。」[11)]

これは今日的な社会的定義の範囲に納まるものではなく，歴史を背負って久しく，黒人奴隷制時代を経て，その後の南部の人種差別制度下で強化され，黒人の北部諸都市への移住に伴う北部的人種差別の派生と共に，差別制度崩壊後も根強い人種主義によって生き延びたところの差別的社会通念である。

南北戦争前後の南部社会を作品の世界に設定した，チャールズ W. チェ

スナットの『ヒマラヤ杉の蔭の家』で，世間では黒人の血を引くことが知られているが，白人と全く区別がつかない少年，ジョン・ウォールデンに対して，判事アーチボルト・ストレイトが言う。

「何時か，何処かで，お前は一人の黒人を祖先に持ったのだよ。黒人の血は一滴あっても，それでその人はすっかり黒人になるんだよ。」[12)]

この場面は，偏見の極めて少ない人物が一少年に，偏狭な町を去って自由な土地で機会を手にするよう忠告する上で，社会の現実を分かりやすく伝えたところであるから，「一滴でも黒人の血が混じると，人は黒人になる」という言葉に，この人物は差別的偏見を込めてはいない。だが，俗的な言葉，「黒人の血」を正確に表現すれば，「黒人の遺伝子」ということになろうが，アメリカ社会においてこれを持つ人を社会的に黒人に分類するということは，取りも直さず，その人を黒人と同じく差別することを意味するのである。つまり，この種の分類は黒人差別の上に成り立っているのだ。

20世紀初頭の悪名高い，黒人憎悪の代表作家トーマス・ディクソンは，黒人から参政権と社会的平等権を剝奪することを目的とし，またそれを正当化した作品『豹の黒点』(1920年）において，白人至上主義者の牧師で政治運動家であるジョン・ダーハンに次のように言わせる。

「一滴でも黒人の血が混じると，人は黒人になる。一滴の血で，頭髪はちぢれ，鼻はたいらになり，唇は厚くなり，知性の光は消え，野獣の情欲に火がつく。黒人平等実現の始まりは，この国の生命終末の始まりである。」[13)]

『豹の黒点』に続くディクソンの同種の作品『クランズマン』(1905年）の出版とこれを映画化した『国家の誕生』の上演は，本稿1に述べたが，ウォ

ルター・ホワイトも体験した，1906年のアトランタ人種暴動を引き起こす原因の一つともなり[14]，チェスナットが行動して，オハイオ州クリヴランド市での上演を阻止した程[15]，その映画は黒人差別に満ちたものであったようである。

ベロウが長年夫婦として暮らし，二人の間に一女をもうけた妻に万が一にも黒人の血が微量だに通っていたなら，彼は妻を100パーセントの黒人と見なし，家に置かない，と妻の二人の親友の面前で手を打ち振って言明したのは，かの作家ディクソンが流布させた次元の差別的偏見の虜の一人であったと見られる。

クレアがこの時，どんな思いをしたか，作者ラーセンは書いていない。だが，それはアイリーンがドレイトン屋上レストランで感じた心境，これは1で述べたが，その一部と重なるものではなかったか。

「……憤りと嘲り，ついで恐れが次々に，雪崩の如く彼女を襲うのを感じた。……心が乱れるのは……それが何処であろうとも，人のいる場から追い払われることを想定するからであった。」[16]

アイリーンは，クレアのように最終段階での「パシング」をしているのではないから，「人のいる場」から追われることを想定したのだが，クレアは自分の夫と娘がいる自分自身の家庭から追い払われることを想定せざるを得なかった筈だ。

さて，三人の女性だけが胸襟を開いて語った時，クレアとガートルードは妊娠中の恐怖を告白した。二人には，程度の差はあるにしても，出産によって「パシング」が破綻する恐れがあったためだが，ガートルードの不安は，黒人に関する社会的定義を支える人種偏見と人種混交の現実とが相互作用することによってもたらされた一典型と言える。

ガートルードは，これは2で述べたが，黒人の身体特徴は

「数世代飛び越えて，突然現われるから恐ろしい。」[17]

と言う。これは黒人の遺伝子だけが隔世遺伝する，しかも全面的に遺伝が現われるという意味内容であるところに気をつける必要がある。

隔世遺伝は人種，民族の相違に拘わらず，動物体としての人間に生ずる。ところが，彼女の言っている意味は，黒人の身体特徴だけが遺伝するのであり，例えば，金髪，栗毛，赤毛などの直毛はそうならず，黒い，ちぢれ毛だけがそうなるというものである。そればかりではない。彼女を恐れさすのは，皮膚の地質，つまり滑らかさなどではなくて，皮膚の色であり，黒い肌色がそっくりそのまま隔世遺伝すると考えている。

この種の非科学的で，人種差別観を骨組みにした迷信はアメリカ社会に流布している。それが，ミュルダールやドレイク，ケイトン達によって社会科学の分野で批判材料として取り上げられている怪談“真黒赤ん坊”である。

これは既にその概略を述べたところの，ケイト・ショパンの作品『デザレイの赤ん坊』の題材に酷似しているが，女性の指の爪に関する記述はショパンのものにはなく，赤ん坊の姿もそんなに極端なものではない。文学作品ではない怪談であるから言うに及ばぬことかもしれない。ミュルダール達が取り上げているものは，エドワード M. イースト著『遺伝と人間』の一節である。

「メロドラマ作家達が読者の気持ちを悩まそうと，好んでつかう話の筋は指の爪の付け根のところに出る白い半月に，その兆しの暗い影がする美しい女性と高名な大農園貴族の跡取りが結婚し，そのうちに，石炭のように黒い赤ん坊が生れる，というものである。この話は枠組みがいいから，スリルを呼ぶ。人は身震いし，息さえ止めて，黒ずんだ胎児が産声を発するのを待つ。」[18]

遺伝学者イーストは，これは極めて理不尽な話で，こんなに黒い子供が生れるには，この夫婦の双方にそれだけ充分な遺伝子が必要であり，さらに黒人の遺伝子を持つこの女性が，黒人の男性と不倫の関係を持たない限り，肌色の黒い子供は生れないと述べている。しかも，その場合でも子供は当の黒人の男性より色は黒くはないのである。石炭のように黒い子供が誕生するには，両親共にそれだけの遺伝子を持ち合せる必要がある。この場合，二人は白人と区別がつかない程白くはない。話の馬鹿らしさが分かろう。しかし，この話に似たことが実しやかに囁かれ，我が事のように身震いするという心理状況は，ただ単に遺伝学の基礎知識の欠如と，差別的偏見に由来する黒人嫌悪の感情にその原因を求めて終るものではない。この話を実しやかなものにするところの社会的現実がある。それは白・黒両人種間における人種混交と黒人に関する社会的定義がそれである。この二つがつぎの現実を導き出す。

「アメリカにおいては，黒人であるには，必ずしも何らかの黒人の身体特徴がなければならないということではない。」[19]

これが発揮する社会的・法律的な力の一例を挙げてみよう。1890年代の終りに近い頃，当時南部諸州は人種間結婚および同棲を法律で禁止していた。その時期のテネシー州の出来事である。

「メンフィス市のサラ・クラークは黒人の男性を愛し，この男性と公然と暮らしていた。昨年の春，人種混交罪で起訴された時，彼女は法廷で，自分は白人女性ではないと宣誓した。これによって彼女は懲役刑を免れ，この男性と違法な関係を邪魔されることなく継続して行った。」[20]

アメリカでは，その人種区分に関する社会的定義がもたらす実態把握の不

正確さによって，白人が自分を黒人として通すことが可能となり，また自然に通ってしまう状況が常に存在している。

「著名な社会学者ロバート•パーク博士は黒人専用ホテルの部屋を取るために，二度ばかり黒人で通した。黒人居住地区の社会事業施設で仕事をしていた若い白人女性が，一カ年ばかり黒人の間で働いていて，ほとんどの黒人が彼女を黒人であると思い込んでいるばかりか，彼女が自分は白人です，と言っても冗談だと言って信じないのに驚いた。」[21)]

アメリカでは，正に黒人であるためには必ずしも黒人の身体特徴を必要としない社会的現実が実在している。この現実の前に，白人が黒人で通すこと，白人と区分のつき難い混血人が白人として通ることを阻止する手だてはない。こうした状況の中で，人びとは結婚し，婚外交渉し，人種混交の歴史を持って今日に及んだのである。従って社会学者ドレイクまたケイトンが言う如く，

「一体どの白人が，自分に黒人の血が混じっていないとか，まだどの『パシング』している黒人が，遠い昔にわずかだが黒人の血を受けている“白人”と結婚することは有り得ないなどと断言できようか。」[22)]

多様な形の人種混交を持つ社会において，さらに黒人であること自体で多大な不利益を被る人種主義的社会においては，黒人の隔世遺伝，俗的に言えば黒人の先祖返りが突出して懸念され，不安を誘い，理不尽で差別的偏見に満ちた「真黒赤ん坊」怪談が成り立つのだ。

〔注〕

1) Nella Larsen, *Passing* (Arno Press and The New York Times, 1969), pp. 97, 98.

2） *Ibid.,* p. 59.
3） *Ibid.,* p. 60.
4） *Ibid.,* p. 61.
5） *Ibid.,* p. 66.
6） *Ibid.,* p. 67.
7）8） *Ibid.,* p. 68.
9） *Ibid.,* pp. 69, 70.
10） *Ibid.,* p. 70.
11） Gunnar Myrdal, *An American Dilemma,* Vol. I (Pantheon Books, 1972), p. 113.
12） Charles W. Chesnutt, *The House Behind the Cectars* (The Gregg Press, 1968), p. 170.
13） Thomas Dixon, *The Leopard's Spots* (The Gregg Press, 1967), p. 244.
14） Walter White, *A Man Called White* (Arno Press and The New York Times, 1969), p. 8.
15） Frances Richardson Keller, *An American Crusade* (Brigham Young Univ. Press, 1978), p. 245.
16） Nella Larsen, *op. cit.,* p. 19.
17） *Ibid.,* p. 60.
18） Gunnar Myrdal, *op. cit.,* p. 1208.
19） Gunnar Myrdal, *An American Dilemma,* Vol. II (Pantheon Books, 1972), p. 683.
20） Ida B. Wells-Barnett, *On Lynchings* (Arno Press and The New York Times, 1967), p. 8.
21） St. Clair Drake and Horace R. Cayton, *Black Metropolis,* Vol. I (Harper Torchbook, 1945), pp. 164, 165.
22） *Ibid.,* pp. 172, 173.